

# 梵文『大乘莊嚴經論』にあらはれたる三性説管見

— 求法品 (Dharmaparyeṣṭy-adhikāraḥ) 第九を中心として —

野 澤 靜 證

## 序

大乘莊嚴經論の教學はその組織の上より之を大觀するとき、所詮所學處 (yāta cikasante) ・如是學 (yathā cikasante) 能修學人 (ye cikasante) を内容とする菩薩行、換言せば、成熟有情と自佛法成熟との二利行たる菩薩行であつた。<sup>①</sup>而してかかる菩薩行をして眞に菩薩行たらしむる根據は後に論する如く三性説である。されば三性説は本論の中心學説であると云はねばならぬ。このことは獨り本論に限つたことではなく、本論と共に初期瑜伽唯識學派の根本資料とせらるる中邊分別論・法法性分別論についても云はれ得ることである。

本論求法品第九第三六偈<sup>②</sup>には

諸佛は 諸有情の攝受の爲に、所相と能相と表相とを差別して説き給へり

とあるが、所相 (lakṣya) とは色・心・心所・心不相應行・無爲、能相 (lakṣaṇa) とは三性の相、表相 (lakṣaṇa) と

梵文大乘莊嚴經論にあらはれたる三性説管見(野澤)

は支持 (ādharma)・増長 (ādāna)・鏡像 (ādarśa)・明悟 (aloka)・所依 (āśraya)・即ち資糧道・加行道・見道・修道・究竟道である。この三相の關係につき、<sup>④</sup>安慧は第三の表相を「能知の智 (ces-par-byed-paṇi ye-ces jñānājñāna)」とし、之に對して初の二相、即ち所相・能相を「所知の境 (ces-par-bya-baṇi yul jñeyavisaṃaya)」として詮し、この「所知の境」を更に分別説して所相を能相の所依 (grāhaka) となしてゐる。惟ふに、所謂五位百法なる所相とは、自界 (svadhatu)・自種子 (svabhāva) の意味なる阿賴耶識より所取能取の二として顯現した上での雜染清淨の一切法を纏めたものに外ならないから、之をその顯現する過程に於て眺めるときには、所相とはとりもなほさず「識の顯現 (vijñāna-pratibhāsa)」<sup>⑦</sup>「識の轉變 (vijñāna-pariṇāma)」<sup>⑧</sup>「緣起 (pratītyasamutpāda)」と云ふことになるであらう。由て、この三相を攝大乘論の組織の上で論ぜば、所相は所知依 (jñeyakāraṇa)・能相は所知相 (jñeyalakṣaṇa)・表相は入所知相 (jñeyalakṣaṇa-praveśa) に相當せしめ得るであらう。更に之を唯識三十頌の組織に當てて云へば、初偈より第十九偈までは所相に、第二〇偈より第二五偈までは能相に、第二六偈以下は表相に配當し得るであらう。さればこの三相は後世緣起門唯識・三性門唯識・唯識悟入位として知らるる唯識説述の三方面に外ならない。

然るに、本論に於ては緣起門唯識の組織的な説述はあまり見出されない。又、三性門唯識及び唯識悟入位については比較的組織的な説明が與へられてはゐるが、世親の釋のみによつては充分理解できない點がないでもない。然し幸にも、安慧・無性の詳細なる註釋が存し、それに依つてそれら難解な點を鮮明ならしむることが出来るから、本論の研究に際し、安慧・無性の釋をさしをいて行ふ如きことは到底首肯すべからざる所作と云はねばならぬ。

さて、本稿は如上の見地に立ち三性説を論ぜんとするものであるが、未だ學界には安慧・無性の註釋はあまり紹介

されてゐないやうであるから、紙数の許す限りそれら註釋を引用しつつ論述を進めたいと思ふ。切に學界諸先輩の御叱正を乞ふ次第である。

尚ほ、依用の西藏譯はすべて大谷大學圖書館所藏、寺本婉雅教授御將來北京版である。筆者は、それらを山口益先生が使用せらるるとき、それを筆寫する機会を與へられ、且つ本稿起草の間、數々の懇切なる御垂教に接した。茲に誌して謝意を表す。

註① 佛教研究(佛教研究會編輯)第二卷第二號、拙稿「智吉祥造『莊嚴經論總義』に就て」參照。

② 本論、中邊分別論及び法法性分別論の三部が初期瑜伽唯識學派の根本資料とせらるることにつては、F. Obermiller, The Sublime Science of the great vehicle to salvation, reprint from Acta Orientalia, Vol. IX, p. 94 (1931).

尚ほ、中邊分別論、法法性分別論の中心學說が三性說であることに關しては山口益氏譯註『中邊分別論釋疏』序論三、「辨中邊論教義の概観」、及び常盤博士「佛教論叢」中の山口益氏著「法法性分別論管見」緒言(二)參照。

③ Mahāvāsanāśāstrālamkāra, par S. Lévi, p. 64

④ Sūtrāntakāraṇītibhāṣya; Mdo. ḡrel. XLVI, p. 205, a

/ de-la mshon-bya dai mshan-rīd gñis ni 'ces-par-bya-baḥi yul lta-bdjo // mshon byed ni 'ces-par-byed-paḥi ye-'ces te /  
/ ḥdi (mshon-bya) ni mshan-rīd gsum gyi gñi yin-no //

⑤ 安慧の註には色・心・心所・心不相應行・無爲の順序になつてゐて、後世の如く唯識所變の次第に依る心王・心所・色・心不相應行・無爲の順序とはなつてゐない。又、百法とせられてゐたか否かも疑問である。即ち、色・心不相應行については何等手掛りを得ないけれども、先づ心・心所については本論功德品第二〇、如實智分別(yathābhūta-parijñānavibhāga)下の第四九偈に出づる所縛の心・心所に對する安慧の註には「心は八識を指す。五蘊中の識蘊のことである。心所は受蘊・想蘊の二及び觸・作意等の五十、一、心所を指す」云々とあつて疑問を懷せる點はない。然るに無爲についての安慧註が問題である即ち本論求法品求相下の第三七偈の安慧註に次の如く云ふ。「不變異性(avivartita)とは虛空無爲・擇滅(無爲)・非擇滅(無

梵文大乘莊嚴經論にあらばれたる三性說管見(野澤)

爲)・眞如(無爲)を指す」と。大乘五蘊論(大正、卅、八五〇、a)及び大乘廣五蘊論(同、八五四、c)には何れも無爲について「虚空無爲。非擇滅無爲。擇滅無爲・及眞如、等」と云ひ、先きの安慧註と同じく四無爲を列舉しながら、「等」として等取するは不動・想受滅の二無爲を指すと思はれるが、本論に對する安慧註には前引の如く何等等取するところがないからである。尙ほ最近山口益先生は大谷學報第十九卷第一號三五頁に於て「中國毘婆沙師が四無爲を立してゐたことを紹介してゐられる。

⑥ 阿頼耶識が「自界」・「自種子」なることに關しては本論成立大乘品第一・第一八偈、求法品第十一・第三二・第四四偈、功德品第廿・第四九偈・第五一偈 (Mahāyānasūtrāṅgikā, p. 7: 69; 66; 66) 參照。

⑥ 所相が阿頼耶識より所取能取の二として顯現した上での雜染清淨の一切法を纏めたといふ點については、求法品第十一・第三四偈(同上 p. 63) 參照。

## 一、三性設定の意義

先に成熟有情と自佛法成熟との二利行たる菩薩行をして眞に菩薩行たらしむるものは三性説であると云つたが、このことを少しく述べてみよう。先づ、自佛法成熟とは佛性へ悟入する方便道であると考へられるが、かかる「佛性へ悟入する方便 (Buddhatvopayaṃveca)」道なる論題を扱へるものに本論菩提品第九(第七八偈—第八一偈)<sup>①</sup>が存する。安慧はこの論題を釋して次の如く云ふ。

清淨なる法界と四智とを佛性と云ふ。布施波羅蜜乃至禪定波羅蜜までの五を佛性への悟入と云ふ。然るに、五波羅蜜を清淨ならしむるものは般若波羅蜜である故に、「佛性へ悟入する方便を」、般若波羅蜜を「開顯する道として」説く爲に「第七八偈—第八一偈の」四偈を造る。

と。乃ち、方便道とは般若波羅蜜を開顯する道と云ふことである。第七八偈及びその長行に説かるるものが、それを<sup>③</sup>

具體的に指示する。曰く、

現に無なるものこそ現に有なるものの最勝である。一切種に不可得なるものは可得なるものの中の最勝であると許さる。(第七八偈)

遍計所執の自性として現に無なるものこそ實に圓成實性として有なるものの最勝である。遍計所執の自性の一切種に不可得なるものこそ實に圓成實性の最勝の可得である。

と。かくてそのことは三性の有つ内面的展開の過程である。蓋し、般若波羅蜜の智見の逮得に努むることは、とりもなほさず、所取能取として顯現する虛妄分別依他起性の上に實の所取能取として増益せられた遍計所執性がその迷亂としての立場を失ひ、所取能取と離れた空性圓成實性が有性(bhava)として得知せられ、乃ち、佛性へ悟入すると云ふのである。それ故に三性が、中邊分別論眞實品第三に於て根本眞實として論ぜられ、本論求法品第十一(第十三偈)に於て「法の眞實(dhammatatva)」とせられてゐるが、その「根本眞實」及び「法の眞實」とは三性が有つ内面的展開の過程にて表はさるゝが如く、「虛妄(abhuta)に於て虛妄性(abhutatva)を觀じ、眞實(bhuta)に於て眞實性(bhutatava)を觀ず」る出世間智、即ち「一切の所知物(jñeyavastu)に於て顛倒なき無分別智」の逮得によりて顯はにせらるる眞實であると云はねばならぬ。これ<sup>⑦</sup>眞實の義は不顛倒義(aviparīkṣaḥ hi tatvārthah)」とせられ、又、「法<sup>⑧</sup>とは二種である。即ち雜染法と清淨法とである。それら〔一〕法の眞實とはそれら〔二〕法の不顛倒なる相の自性である」とせられてゐる所以であると思ふ。

かくの如く出世間無分別智の逮得によりて、遍計所執された所取能取は全無ではあるが、それは世間性・世俗に於て  
梵文大乘莊嚴經論にあらばれたる三性說管見(野澤)

所取能取としての顯現のみ (prābhāsamāta)・迷亂のみ (bhṛāṇimāta) として有なるものが勝義に於て自性無であり、又、勝義に於ては自性無なるものが世俗に於ては顯現のみ・迷亂のみとして有であると觀ぜらるるのであるから、求法品第二二偈 c—d に於ては有と無とは無差別平等であるとせられ、進んで第三三偈 c—d に於てはかかる有無無差別平等義に據りて「劣乘による出離を遮す (hīnayānagamana-pratiśedha)」とて成熟有情なる利他の妙用を顯示してゐる。殊にこれに對する安慧の註釋はそのことをより明瞭に標識せむるものと云ひ得よう。即ち、

有と無との二は無差別「平等」であると悟了するが故に聲聞の涅槃に入らず。それ故に聲聞乘によりて出離すること遮す。

云何が「遮する」か。諸聲聞は色等の法 (Dhava) 有なりと分別し、それ「有なりと分別して遍計執すること」に依りて苦を怖畏する故に、生滅の相を修習することによりて「生死を」厭離する。厭離して貪と離れる。それより、生死を出離して涅槃に入る。

然るに、諸菩薩は「依地起相中〔所取能取の〕二相としての顯現のみとしては有である」と説かれたるものは、實に識を離れて遍計所執なる色等は有なるに非ず〔との意味なり〕と悟了し、他方、「遍計所執相としては有に非ず」と説かれたるものは、世俗に於て迷亂としての顯現のみとして有である〔との意味なり〕と悟了する故に、生死を厭離しないのである。生死を厭離しないときには、聲聞の如き頭燃を拂ふといふ方法 (naya) にて精進して速かに涅槃に入らず。それ故に、「有無」二無差別「平等」と解了する故に聲聞乘によりて出離することを遮す。

と云ふ。ここに、「生死を厭離せず」、「涅槃に入らず」とは所謂無住處涅槃として知らるる菩薩道修習の究竟目的たる

ものである。由つて、生死の苦を厭離して解脱の涅槃に入らんとする聲聞小乗の行を捨てて生死にも住せず、涅槃にも住せざる菩薩大乘の行に入るは、三性説にその根拠を有することが佛性への悟入についての所説と共に明瞭に理解できるのである。乃ち、三性設定の意義は雑染より清淨への悟入の行道・轉依への行道に於て充足されると考へらる。

⑪ 三性が應知 (jñeya)・應斷 (heya)・應淨 (viśodhaya) とせらるるもの意に外ならない。

註① Mahāyānasūtrālaṅkāra, p. 48

② Sūtrālaṅkāravṛtibhāṣya; XLVI, p. 161, a

/ chos-kyi-dbyinis rnam-par-dag-pa dai / ye-ces bśi la snins-rgyas se-bya-sie / sbyin-paḥi-pha-rol-tu-phyin-pa nas bsum-gtan-  
gyi-pha-rol-tu-phyin-pa lta ni snins-rgyas-su-ḥgyur-ba se-byaho // pha-rol-tu-phyin-pa lta tseg-par-byed-pa ni / ces-rab-kyi-pha-  
rol-tu-phyin-pa yin-pas / ces-rab-kyi-pha-rol-tu-phyin-pa bstan-paḥi-phyir tshigs-sus-b'ad-pa bśi rtsom-mo //

③ ①に同じ。

④ 山口益氏校訂梵本、一一一頁、同和譯一七二頁

⑤ Mahāyānasūtrālaṅkāra, p. 58

⑥ Sūtrālaṅkāravṛtibhāṣya; XLVI, p. 194, b

/ de (de-kho-na) yañ yañ-dag-pa-ma-yin-pa dai / yañ-dag-pa sie rnam-pa-gñis-so // de-la yañ-dag-pa-ma-yin-pa la yañ yañ-  
dag-pa-ma-yin-pa-ñid du mthoñ-ba dai / yañ-dag-pa la yañ yañ-dag-pa-ñid du mthoñ-na de-ñid la (de-) kho-na / ces-pa se-  
byaho //

⑦ 山口益氏校訂梵本「中邊分別論釋疏」一一二頁。同和譯一七三頁。

⑧ Sūtrālaṅkāravṛtibhāṣya; XLVI, p. 193, a'

/ chos ni rnam-pa-gñis-te / kun-nas-ñon-mois-paḥi-chos dai / rnam-par-byan-paḥi-chos-so // chos-de-dag-gi-de-kho-na-ñid  
ni chos-de-dag-gi-mshan-ñid phyin-ci-ma-log-paḥi-rañ-bñin-te /

⑨ Mahāyānasūtrālaṅkāra, p. 60

梵文大乘莊嚴經論にあらはれたる三性説管見(野澤)

## ⑩ Sūtrāṇḍhikāravivēḥḥāṣya; XLVI, p. 197, b-198, a

/ yod-pa dan med-pa-gñis khyad-par-med-par khon-du-chud-pas ñan-ñhos-kyi-mya-ñan-las-las-par mi-ñjug-sic / de-bas-na ñan-ñhos-kyi-cheg-pas ñhyun-ba bkag-go /

ji-la se-na / (198, a) ñan-ñhos rnamis ni gzugs-la-sogs-paḥi dios-po yod-par rñog-cin dñi-ngo-nas sdug-bsal-gyis skrag-pas /

skye-ba dan ñjug-paḥi-rnam-par bsgom-paḥi sgo-nas skyo-bar-byed-do // skyo-nas hñod-chags dan bral-bar-byed-do // de-nas ñkhor-ba las ñhyun-sic / mya-ñan-las-hñas-pa la ñjug-par-byed-do //

byan-chub-sens-dpaḥ rnamis kyis ni gain gñan-gyi-dñan-gi-mñan-ññid la(s) rnam-pa-gñis-su-sñan-bar-sam du yod-par byad-pa-de ññid rnam-par-ges-pa las ma-gñogs-par gzugs-la-sogs-pa kun-brags-kyi-chos yod-pa-ma-yin-par khon-du-chud-pa la gain kun-brags-kyi-mñan-ññid du yod-pa-ma-yin-par-b-ad-pa-de ññid la kun-rñsob-ññi kirul-par sñan-bar-sam-du yod-par-khon-du-chud-pas ñkhor-bar skyo-ba med-do // ñkhor-ba mi-skyo-na ñan-ñhos ñar mgoḥi-chud-la-mo-bsad-paḥi tññal du brison-ññerns myur-nas mya-ñan-las-hñas-par-mi-ñjug-sic / de-bas-na gñis khyad-par-med-par-rñogs-pas ni ñan-ñhos-kyi-cheg-pas ñhyun-ba-las bkag-pa-yin-no /

⑪ *Abhidharmasūtrāḥkāra*, p. 58 及び山口益氏校訂梵本「中邊分別論釋疏」二二二頁、同和譯、一九〇・一九一頁參照。

## 二、三性の名義及びその體

初めに「三性の名義 (abhidhāna)」と云ふ點について考へらるるのであるが、先づ依他起について考へたい。本論求法品(第十一・第五)には「緣に依るが故に」(pratyayādhīnatvāt)と云ふ。それは當然中邊分別論相品攝相下の安慧釋に「他なる諸因諸緣に依りて起り生ずるも自ら起らざる故に依他起なり」とあるに依つて之を理解すべきである。即ち、自ら轉變した現行の種子を因として生じ、因緣と云ふ他のものに繋屬し依つて居る點で依他起と稱せられるのである。それは更に調伏天註の次の語の如くに解釋せらるであらう。即ち、調伏天は安慧の唯識三十頌釋論を復註して

「縁より生ずるといふ聲にて依他起と云ふ語 (abhidhāna) の起因 (pravṛtti-nimitta) を説く」云ひ、更に「他なる因縁に依るが故に依他起と稱す。依る (tantryate) とは生ぜしめらる (upādyaṭe)、種植せしめらる (avaropyate) との意味である」と釋する。ここに「種植せしめらる」とは、現行によつて種子が熏習せらるるを意味すると解すべく、やがてまたその熏習せられた種子より現行の生ずることが「生ぜしめらる」の意味であると解せらるるであらう。

かくの如く依他起は他なる因縁に依りて所取能取として顯現するが、その所取能取としての依他起の顯現が實の所取能取の如くに凡夫によりて見らるる點で、即ち、有分別のみで實體なき點で、遍計所執と稱せられ、かかる實の如く見らるる所取能取を依他起が畢竟して遠離して法性としては不變異に、又、所知の物に於ては顛倒なきものとして圓滿成就せる點で圓成實と名けられる。前者は「彼虛妄分別に於て所取能取の體として顯現せる二としての迷亂は遍計所執性の行相あるもの」と云ふ文等によりて知るべく、後者は「彼依他起の上に遍計所執の二の相無きは勝義である」と説き、勝義として眞如と無分別智との二を説くもの、より組織的には中邊分別論眞實品第十一偈 cīd 等によつて知るべきである。

次に、三性の自體 (svatūpa) について云へば、依他起の體は總じては三界の心心所なる虛妄分別であり、別しては阿頼耶識である。

さて、本論に於ては阿頼耶識に關する組織的な説明もなく、又、阿頼耶の名を用ふことも比較的少ないが、今、阿頼耶識に關する別名を求むれば、成立大乘品(第十八偈)には、(一)「小界 (sunīhadrūpa)」求法品(第三二偈・第四四偈)には、(二)「自界 (svadhātu)」(三)「種子 (bija)」功德品(第四九偈・第五一偈・第七六偈)には、(四)「種子な

る因相 (bijānimita)』(五)「麤重身 (caus/huṭyākāya)』(六)「心 (citta)」等とある。(一)(二)(三)は熏習<sup>⑦</sup>種子の意味での阿頼耶識であり、(四)の「種子なる因相」といふも結局種子としての阿頼耶識である。即ち、無性の註釋によれば「bijānimita」なる複合詞は<sup>⑧</sup>に説かるる三因相の隨二なる「處なる因相 pratisaṭhanimita」なる複合詞と共に持業釋なりとするからである。(五)の麤重身とは安慧<sup>⑨</sup>によれば「煩惱障・所知障を具する阿頼耶識のことである。阿頼耶識は一切の煩惱障所知障の所依となり、諸顛倒分別の依處である」が、これは求法品第三二偈所説の如く、阿頼耶識より所取能取として顯現することは同時にそこに無明と煩惱と共に起る諸分別が生起する意味で、煩惱障所知障及び諸顛倒分別の所依と云ふたのであると解すべきであるから、矢張りこれも(二)の如く「種子としての阿頼耶識」を謂ふものである。(六)の心については安慧は唯識三十頌第二偈 c—d・第三偈・第四偈 a—b を引用して釋してゐるから「一切種子識」の意味の阿頼耶識である。

かくの如く、阿頼耶識は全く種子識であつて三界内外の諸法の生起の因であることが理解せらるるが、更に(四)についての安慧の註釋によりて之を論ずれば、種子なる因相即ち「阿頼耶識は、處なる因相と及び受用の因相との二因相の隨眼・習氣の依處である」とせられてゐるから、處なる因相とは、阿頼耶識所緣の器世間であり、受用の因相とは (viśaya)とは同一意味である」とせられてゐるから、處なる因相とは、阿頼耶識が器世間・五境・六識の内外一切諸法の隨眼・能受用なる六識の所受用なる五境と云ふことになる。されば阿頼耶識が器世間・五境・六識の内外一切諸法の隨眼・習氣の依處であるといふことは、中邊分別論真實品(第二三偈)に云ふ「有因」即ち「種子に攝せられたる阿頼耶識 (bija-saṃgrīhaṃ ālayavijñānaṃ)」と云ふことである。而して、(四)の後半即ち第四九偈 c—d に、處なる因相と受用の因

相と種子なる因相とによりて

所依を具する心心所が種子を具する故に、(「三界」に縛せらる。〔第四九偈 c. 1 d〕)

と云ふについて、安慧は「意味上ではすでに説ける彼縛(三因相)によりて五蘊が縛せらる」と釋し、更に此の第四九偈は、その總義として「云何に有情が縛せられてゐるかを遍知す」ことを説くものとせられてゐるから、その所説の關係上、解脱に對して「縛せらる」と云ふたまでで、「縛せらる」とは「顯現すること」に外ならない。されば先の中邊分別論の「種子に攝せられたる阿賴耶識」に對すれば、三因相によりて五蘊が縛せらるるとは、さうに説かる「處と身と受用とに攝せられたる阿賴耶識 (pratisādhadehabhogasagrīhītam ālayavijñānam)」及び、「轉識に攝せられたる意と執と分別 (pravṛtīvijñānasagrīhītam manodāśaravīkapam)」と云ふことである。従つて、それは本論求法品第四〇偈に説く所取能取としての三種三種の顯現及び、中邊分別論相品第三偈に説かるるもの、即ち、外境と有情と我とと別との四種の顯現と等しくなる。<sup>(14)</sup>

かくの如く、種子識としての阿賴耶識・因に攝せられたる阿賴耶識が、更に三種三種の顯現、四種の顯現の本源として考へられた場合、その顯現の本源より三種三種又は四種として顯現することが緣起であり依他起であるから、本源を主として考へれば依他起の體は阿賴耶識であり、顯現の過程に重點を置けば虛妄分別であると云はねばならぬ。次に遍計所執の體は、四種又は三種三種の所取能取としての顯現を實の所取能取として増益せる容態である。即ち所取として顯現したもの、所取分たる外の緣起法、例へば「腹は圓く口は小さくして水を充たすに足るもの」に對し

て瓶といふ名が施設せらるる如く、對象としての緣起せる法即ち義 (artha) は實に種々なる名 (nama) の生ずる所依である。然るに凡夫は、名の施設せらるる所依なる義に於て——言説に善巧なると否とを問はず——名に依りて自心所現なる諸法の自性と差別とを遍計執し、かくて還つて復た、義に依りて名を遍計執するに至る。これ即ち本論求法品第七七偈に於て説かるる十種分別中の「名の如くに義を執する分別 (yathānāmarthabhīvecavikalpa)」<sup>(16)</sup>「義の如くに名を執する分別 (yathārthanāmbhīvecavikalpa)」であつて、同じく求法品第三九偈にては之を

名と義との如く「次第に」義と名との顯現なるもの及び虛妄分別の因相は實に遍計所執相である

となし、長行に、

もし、名の如く義が或は義の如く名が顯現すとせば、虛妄分別のこの所緣〔なる名・義〕は遍計所執相である、實にかくの如き程が遍計執さる、即ち名或は義が。

とせられてゐる。即ち、凡夫が分別するときは、名と義との二を分別するのみであつてそれら二より別に分別さるべきものなく、而も名義互客なる故に遍計所執とせらるるのである。<sup>(15)</sup>三無性論の初の部分にもこれと同様の思想をのべ特に「分別性差別」の第六名字分別——……此依名分別義自性五種……及び五種の「所分別自性」の如きは謂はば本論の註釋として取ることが出来る。又、そこに名義互客なることを三方面より論じてゐることも固より本論所説の意義を理解する上に大なる便を與へるものであるが、安慧は本論の註釋に於てこの名義互客たることに就き次の如く云ふ。即ち、名が義より客ならずして同一自性であるとせば、例へば火と熱とは同一自性なるが故に火の滅せるとき熱もなくする如く、瓶なる物 (vasu-ārtha) が壊滅するとき名も亦無となるべきであらう。然るに、瓶は壊はれて

も類なる名は滅せざる故に名義互客なりとなし、又、義が名より客なるについては、例へば出家せざる分位に在家の名が施設せらるるが、後に出家せるとき在家の名はなくなつても人なる物は無とならないが如くであるとなしてゐる。

かくの如く、名に依り義に依つて分別せられた如き義又は名は無なる故に所謂有分別無實體とせらるるが、安慧に依れば、名の如くに義を執する場合には名が、また、義の如くに名を執する場合には義が、虚妄分別の因相 (nimitta

→visaya→ālambana) であるとせられてゐる。そは次第の如く「虚妄分別によりて (abhūtaparikalpena) 又は「虚妄分

別の上に (abhūtaparikalpe)」と云へる語に關係して理解せらるべきであらう。蓋し、因相 (nimitta) は長行には所縁

(ālambana) とせられ、先にも一言した如く安慧にも「因相と境 (visaya) とは同一意味である」と釋する例を見ること

であるから、義の自性と差別とを標示する作用 (sūcana) ある能標示者 (sūcaka) なる名が虚妄分別の因相即ち所縁

の境であるとは、名によりて「虚妄が二に分別せらるる」とであり、義一名によりて標示せらるる處と身と受用とし

て顯現せるもの、換言せば、十二處を體とせる一切の所知が虚妄分別の因相即ち所縁の境であるとは義の上に「二の

虚妄が分別せらるる」意味に外ならないからである。

かくて、能標示の名と所標示の義、及びそれら兩者の相互結合 (parasparabhisambandha) によりて諸法の自性と差

別とを分別する他に分別の世界はないことになる。これ先の引用文中に「實にかくの如き程が遍計執さる、即ち名或

は義が」と云ふ所以である。かかる分別の世界を分別の機構及びその對治に於ける無倒の觀點に立つて詳述せるもの

が、中邊分別論無上乘品に説かるる「十無倒」中の第二「文に於ける無倒」・第三「義に於ける無倒」・第五「自相に於け

る無倒」・第六「共相に於ける無倒」である。

更に、「名の如くに義を執する分別」と「義の如くに名を執する分別」との無始時來の展轉生起が阿賴耶識中の習氣によるものなることを本論求法品第三八偈に説いたものが見らるる。これは先の「十無倒」中にては第三「作意に於ける無倒」に於て求めらるるが、さて、そこ第三八偈には遍計所執相が三種として説かれてあり、その第一は「言の如き義に對する想の因相 (yathajaparthasamijāya nimittam) であつて、安慧に依れば、それは言説に善巧なるもの (vy-avalakucala) が瓶衣等の言説 (abhiropa) に對して「これは瓶なりこれは衣なり」となす分別とその分別の境なる瓶衣等とであるとせられて居る。第二は、第一の言の如き義に對する想の生起する因 (āraha) なる、阿賴耶識中に滋長せられた習氣である。第三は、第二の習氣より義の顯現することであつて、安慧<sup>(27)</sup>によれば、言説に善巧ならざるもの、瓶なる聲にて言説せらるるものは腹は圓ろく口は小なるものを指すと云ふ工合に瓶の名義相應 (nāmarthasambandha) を知らざるものにも、瓶を見るとき「これは何らかである」となす分別が阿賴耶識中に積集せられた言 (jāpa) の習氣より起るとせられて居る。以上三種の遍計所執相は第一によつて第二の習氣を阿賴耶識中に熏習し、その熏習より第三の遍計所執が生じ、これが復た起點となつて次の關係を起すといふ一環の因果關係とも見做し得るのであるが、それを正しく主題とせるものが、先に關説せる三無性論に依・遍の更互相因によつて生死の相續不斷を説くものと云へよう。而してその第三を第一に或は第一を第三に攝して二種となすときは一聯の因果關係となる。これその第三<sup>(28)</sup>八偈の長行の最後に、

かくの如く、遍計執せらるるものと、及び習氣なる因より〔遍計所執が生ずるとき〕彼〔義と習氣〕との兩者がこゝには遍計所執相であると意趣せられたのである。

と云ひ、乃ち二種となれるものである。

尙ほ、以上關説した求法品第三八・三九の兩偈を次の第四〇偈と關係相望せしめて論ずるときは、中邊分別論眞實品の最後「有爲眞實」に説かるる内容となる。<sup>(30)</sup>そは、彼處に云ふ名身等の施設は此處の三種或は二種の遍計所執相に相當し、因即ち種子に攝せられたる阿賴耶識と、相即ち處と身と受用とに攝せられたる阿賴耶識と、及び轉識に攝せられたる意と執と分別とは、此處第四〇偈に云ふ連類を具する阿賴耶識より三種三種として顯現せるものに相當せしめ得るからである。かくてこれらは又、法法性分別論に「法の相」として説かるるものに内容一致するものとならう。

次に、圓成實の體は云何と云ふに、今暫く、本論に先立ち、中邊分別論に就て之を見れば、そは、前上の中邊分別論眞實品「有爲眞實」に對して「無爲眞實」<sup>(32)</sup>として標舉せらるるものが、目下の關係事情に於て先づ見らるるであらう。即ち、そこには寂靜としての所證の滅と能證の道及び道の所緣の境たる眞如 (tathata) とが擧げられてゐる。その中、道は智で有爲ではあるが、一方にはそれによつて寂靜ならしむる點、他方には業と煩惱とによりて現集成せられざると集成せられざることによりて顯表せらるるとの點、この二點によつてしばらく無爲に攝せらるると安慧は釋してゐる。これを又、同論眞實品龜細眞實の所説によつて云へば、道は所知物に於て顛倒なき點で圓成實性とせられ、涅槃及び眞如なる無爲は不變異なる點で圓成實性とせられてゐる。更に、同じく攝眞實下にて正智と眞如とを、不顛倒なると不變異なるとの圓成實なるによりて圓成實性となすものも全くこれに同じである。

いま本論にては相の方面より之を論じてゐる。そは、求法品第四一偈に於て、遍計所執なる所取能取の體無なると所取能取の體無なることの有なると有無無差別平等とがその自相 (svakṣana)、客塵に染せられたると自性明亮にして

清淨の自性なることがその雜染清淨相 (kleśavyavādanalakṣaṇa) とせられたるもの、一切の戲論をはなれたるが故に究理論者の分別の境でない無分別相 (avikalpakakṣaṇa) とせられるもの、及び、本論眞實品第一偈に五種の無二相 (advaya-lakṣaṇa) によつて勝義相とせられたるものである。それら圓成實相を示せるものは何れも法界空性眞如を證はせるものであつて、所謂中邊分別論の二種の圓成實性中、不變異による圓成實性に相當するものであるから、これのみが圓成實性でないことになる。本論に於ては夫故に、これに關聯して本論眞實品第六の組織が一瞥せらるべきであらう。そは、その第一偈は勝義相 (paramārthalakṣaṇa) について論ずるものであり、安慧はその「勝義」に二種あることを釋し、それが二種の圓成實相であるからである。先づその二種の勝義について次の如く云ふ。<sup>(37)</sup>

眞如清淨法界と無二 (advaya) の無分別智との二種の勝義がある。

眞如 (tathatā) は何故に勝義と稱せらるるか。〔曰く〕、聖道を修習せる果なるが故に義と云ひ、一切法の所依なるが故に勝と云ふ。或は又、義とは行境 (locuta) のこととして勝なる無分別智の行境なる故に勝義と云ふ。

而してかかる意味に於て先づ最初の勝義なる眞如が第一偈—第五偈までによりて說かれ、第六偈以下終りまでが第二の勝義即ち眞如を行境とする無分別智の說述なることを次の如く云ふ。<sup>(38)</sup>

二種勝義の中、これまで(第五偈まで)にて眞如なる勝義を説き已りて、今、無分別智を相とする勝義を説く。有情迷亂に住し苦によりて染せらるると雖も顛倒に征服せらるるが故に、迷亂に住することと苦によりて染せらるる」とを悟了せず、とて先に顛倒を訶したれば今彼〔顛倒〕の對治として不共なる無分別智に關して〔説く。即ち〕彼無分別智によりて諸菩薩は云何様に法無我に通達して佛地を得るかを説く爲に四偈を造る

と。乃ち、顛倒の對治としての無分別智によりて顛倒が顛倒なりと批判せられ、以て眞如に契當する過程及び結果を示すものが眞實品一部の要約と考へられるであらう。かくの如く所證の理たる眞如のみを説くのではなく能證の智・道をも眞實として併せ説くこと、先の中邊分別論の所説と同じきものを見るのである。因みに、中邊分別論釋疏根本眞實下に引用せる本性と無垢と道と所縁との四種清淨によりて圓成實性を説けるものも單に開合の相違にすぎない。

註① *Mañyāsūtrāṅkāra*, p. 67.

② 山口益氏校訂梵本、二三頁、同和譯、二三頁。

③ *Triṃśikāṭika*, p. 57, a.

/ rkyen-las-byun-baḥi sgras ni gsum-gyi-dban ṣas bzod-pa-ḥbyun-baḥi-rgyu bstan-to /

④ *ibid*, p. 57, b

/ rgyu-dun-rkyen-gsum-dag-gyis dban-byas-pas ni gsum-gyi-dban ṣas-byu-se / dban ṣas-byu-be-ni rkyed-pa dan bskrun ṣas-byu-

baḥi-dā-tshig-go /

⑤ *Mañyāsūtrāṅkāra*, p. 59.

⑥ *ibid*. p. 7; 63; 66; 169; 174.

⑦ *Mañyāsūtrāṅkāra*, XLV, 180, a

/ de-la rten ḥid rgyu-miṣhan yin-pas-na rten-rgyu-miṣhan-te / las-ḥdisin-par tshig-bśadupo /

/ lois-spyod-kyi-rgyu-miṣhan yin-pas-na lois-spyod-rgyu-miṣhan-te / deḥi-skyes-bur tshig-bśadupo /

/ sa-ion ḥid rgyu-miṣhan yin-pas-na sa-bon-rgyu-miṣhan-to /

その中、處即ち因相なりとの意味の「*pratyāṅmīṣhan*」とて、持業釋 (*karma-dhāraya*) の複合詞 (*saṃāsa*) とある。

受用の因相といふ意味の「*bhoganīṣhan*」とて、依主釋 (*atā-puruṣa*) の複合詞とある。

種子即ち因相なりといふ意味の「*bijanīṣhan*」とて、持業釋の複合詞とある。

⑧ *Sātrāṅkāravivādhāya*, XLVII, p. 244, b

梵文大乘莊嚴經論にあらはれたる三性說管見(野澤)

/ gnas-nan-len-gyi-tshogs-ni kun-gsi-rnam-par-ces-pa ñon-mois-pa-dan-ces-byaḥi-sgrib-pa-dan-beas-pa-la-bya-sie / kun-gsi-rnam-par-ces-pa-ni ñon-mois-pa-dan-ces-byaḥi-sgrib-pa-thams-cad-kyi-ten-du gyur-pa phyin-ci-log-tu-rnam-par-r'tog-pa-rnams-kyi-gnas yin-no /

⑨ ibid. p. 266, a

⑩ ibid. p. 242, a.

kun-gsi-rnam-par-ces-pa-ni gnas-dan-lons-spyod-la-sogs-paḥi-mshan-maḥi bag-la-sa-(ñul)-ba-dan-bag-chags-kyi-gsi-byed-paḥi-phyir / sa-bon-gyi-mshan-ma ses-bya-sie /

⑪ ibid. p. 242, a

/ mshan-ma dan yul ses-bya-ba-dag don-gcig-pa(s)

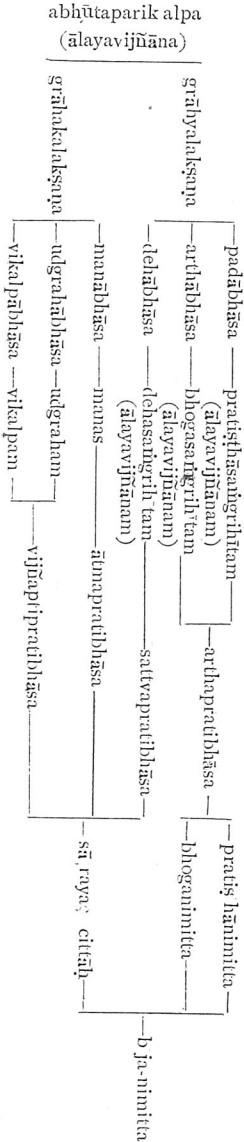
⑫ 山口益氏校訂梵本、一六二頁、同和譯、二五九—二六一頁。

⑬ Sūtrāṅkāra-viṭṭibhāṣya; XLVII, p. 242. b

/ don-du b'ad-paḥi beḥ-pa-dos phun-po-lia beḥs-so ses-bya-baḥi-don-to /

⑭ Mahāvāsanāśūtrāṅkāra, p. 64. 尚ほ、中邊分別論眞實品第二三偈、同相品第三偈(山口益氏編、辯中邊論、六七、四頁)及び本論功德品第二〇の第四九偈(梵本一六九頁)と同一思想を語るものである。今比較して之を圖示すれば左の如し。

本論求法品第40偈 中邊分別論眞實品第23偈 同相品第3偈 本論功德品第49偈



- ⑮ 瓶 (ghaṭa = bham-pa) に對する安慧の釋。  
 Sūtrāṅkāravṛttibhāṣya; XLVI, p. 191, b; XLVII, p. 239, b; 140, a 其他諸所に出。
- ⑯ lto zlum-po ske sen-sen-po chu blags-su-rin-ba-stc/  
 Mahāyānasūtrāṅkārā, p. 76
- ⑰ ibid. p. 64
- ⑱ 宇井伯壽博士著「印度哲學研究(第六)」三三三、二一九—二二三頁參照。
- ⑲ Sūtrāṅkāravṛttibhāṣya, XLVII, p. 240, a. (取意)
- ⑳ ibid. XLVI, p. 207, a  
 / nam miñ-gi-sgo-nas don yod-par-tog-pa-na-ni miñ yin-dag-pa-ma-yin-paḥi-kun-tu-rtoḡ-paḥi-rgyu-yin-no // nam don-gyi-sgo-nas miñ yod-par-tog-na-ni don yin-dag-pa-ma-yin-par-kun-tu-rtoḡ-paḥi-rgyu-yin-te /
- ㉑ 山口益氏校訂梵本、「中邊分別論釋疏」四六頁、同和譯、七三頁及び七六頁註③參照。
- ㉒ 同上、梵本、一六二頁、同和譯、二六〇頁及び二六二頁註②參照。
- ㉓ 同上、梵本、二二二頁、和譯、三四七頁參照。
- ㉔ 同上、梵本、十三頁、和譯、十八頁及び二二頁註①參照。
- ㉕ 同上、梵本、二一七、二二八、二二一、二二三頁、和譯三四三、三四四、三四七—三四九頁。
- ㉖ Mahāyānasūtrāṅkārā, p. 64.
- ㉗ Sūtrāṅkāravṛttibhāṣya; XLVI, p. 206, a-b. (取意)
- ㉘ 宇井伯壽博士著「印度哲學研究(第六)」二一八頁參照。
- ㉙ ㉚ 參照。
- ㉛ ㉜ 參照。
- ㉝ 常盤博士「佛教論叢」中の山口益氏著「法性分別論管見」五四一頁參照。
- ㉞ 山口益氏校訂梵本、一六二、一六三頁、同和譯、二六一、二六二頁。
- ㉟ 同上、梵本、一二六、一二七頁、同和譯、一九八、一九九頁。

梵文大乘莊嚴經論にあらはれたる三性說管見(野澤)

③④ 同上、梵本、一三三頁、同和譯、二〇八頁。

③⑤ *Malayānsūtrāṅkāra*, p. 65

③⑥ *ibid.* p. 22

③⑦ *Sūtrāṅkāravṛttibhāṣya*, XLVI. p. 84, a-b.

/ *don-dam-pa rnam-pa-gñis-te / de-bñin-ñid chos-kyi-dbyinis rnam-par-dag-pa dan / gñis-su-med-paṭi-rnam-par-mi-rtoḡ-paṭi-ye-qes-so /*

/ *de-bñin-ñid cñi-phyr don-dam-pa ṣes-bya ṣe-na / lphags-paṭi-lam bsogoms-paṭi-lbras-bu yin-pas don ṣes-bya-br-la / chos-thams-cad gyi-rten-(84) b)-du-gyur-pas dam-pa ṣes-byaho // yai-na don ṣes-bya-ba-ni yul la-bya-ste / rnam-par-mi-rtoḡ-paṭi-ye-qes dam-paṭi-yul yin-pas don-dam-pa ṣes-byaho /*

③⑧ *ibid.* p. 89, b

*don-dam-pa-rnam-pa-gñis las ñid-man-chud-du de-kho-na-ñid-kyi-don-dam-pa bsian-nas / da-ni rnam-par-mi-rtoḡ-paṭi-ye-qes-kyi-mtsheñ-ñid-kyi-don-dam-pa steñ-te / goñ-du sons-can lkhrl-pa la gnas-pa dan / sdug-bsñal-bas ñon-mois-par-ñeyur kyai phyin-ci-toḡ-gis non-pas lkhrl-pa dan sdug-bsñal-bar khor-du-na-chud kyai ṣes phyin-ci-toḡ la smad-nas da dñi-gñen-por ñun-moi-na-yin-paṭi-rnam-par-mi-rtoḡ-paṭi-ye-qes-kyi-dban-du-bya-ste / rnam-par-mi-rtoḡ-paṭi-ye-qes-das byai-chub-sems-dpaṭi-rnams ji-lar chos-la-bdag-med-par-rtoḡs-nas sañs-rgyas-kyi-su thob-par-bsian-paṭi-phyr tshigs-su-b,ad-pa-bñi-rtsom ṣes-bya-baṭi-don-to /*

③⑨ 山口益氏校訂梵本、一一二頁、同和譯、一七二頁。

### 三、三性の眞實

以上の如きを體とせる三性の眞實につき、本論<sup>①</sup>(求法品第十三)に次の如く云ふ。

常に二と離れたる眞實は遍計所執性である。所取能取の相としては畢竟じて無なるが故である。

亂の所依は依他起〔性〕である。彼〔依他起性〕によりて彼〔所取能取〕を遍計するが故である。

言説すべからず又無戲論を體とするものは圓成實性である。

と。中邊分別論眞實品根本眞實について論ぜらるる内容もこれと一致するものであるが、彼處に第三圓成實性の眞實について、有性無性を以て語るところ些か相違するが如くである。然し、本論に云ふ「無戲論」とは安慧によれば「所取能取の法〔所言能言の法〕なき故に無戲論である」とせらるるから、そは彼の論の無性に當り、更に、所取能取の二なき體として語らるる妙有性、性は言説すべからざるものであるから何ら相違なしと云はねばならぬ。

この三性の眞實が不顛倒相として見證せらるる様相は、本論に於ては、求法品第十一の第五「眞實の如幻 (tatriva mayopamaṃ)」相として、中邊分別論に於ては眞實品の第二相眞實 (aśaṃatattva) としてのべられてゐる。而してその「眞實の如幻相」下に頌せらるる十六偈は智吉祥によりて十一項に分科せられ、先づその第一項「幻相 (mayalakṣaṇa)」を説く第十五・十六・十七の三偈の初二偈の長行に次の如く云ふ。

木片と土塊等なる迷亂の因相が幻の呪によりて捕へられたるとき、虚妄分別は依他起性なりと知るべきである。

彼幻に於て幻所作の象馬金等の形相がそれら「象馬金等」の體として現はるる如く、彼虚妄分別に於て所取能取の體として顯現せる二としての迷亂は遍計所執性の形相あるものなりと知るべきである。(以上第十五偈の長行)

彼處に彼體あらず、即ち、幻所作のものに於て象性等は〔實には〕無なる如く、彼依他起の上に遍計所執なる二相無きは勝義なりと説かる。

と。これに依れば、虚妄分別は依他起性にして迷亂の因相であるが、その虚妄分別に於て所取能取の體として増益せられた二としての迷亂が遍計所執性の相あるもの、又、同じ虚妄分別の上に、遍計所執性なる所取能取の二なき相が圓成實性であるから、三性は虚妄分別依他起性中に攝せらるることとなる。同様の説は中邊分別論(相品攝相下)にも見出さる。かく虚妄分別は三性を統一するものであるから、その虚妄分別が不顛倒なる相に於て、即ち、「實」には無なるに顯現せるものであるから、その顯現の體は不成就であるが而も迷亂のみとして有なること」が理解せらるるとき、自ら三性の眞實相が會得せらるる (upalabhyate) のである。この點を述べるのが次の第十七偈である。曰く、

彼の無なるとき、彼の因相の眞相が得知せらるる如く、その如く所依轉變したるときは虚妄分別の「眞相」が得知せらる。〔第十七偈〕

幻所作の無なるとき、彼因相なる木片等の眞相なる眞實義 (bhūtaṁ) が得知せらるる如く、その如く所依轉變したるとき、二としての迷亂無き故に虚妄分別の眞實義が得知せらる。

と。之に對して安慧はより詳しく次の如く註釋を與へてゐる。曰く、<sup>⑪</sup>

例へば、幻作師の呪・藥の力によりて土塊木片より馬象等が顯現するけれども、呪・藥の力を斷するより馬象等の形相消失して現はれざるときは、象馬等の形相は「木片土塊なる幻の因相より顯はれたることを了得し、馬象〔等〕を見ずして「幻の因相なる」土塊木片〔等〕を見るに至る。

同様に、所取能取の二「の迷亂は常に」無しと解了するとき、即ち、依他起相なる阿賴耶識が轉依するとき、「所取能取の」二と離れたる相として「虚妄分別依他起の眞實義なる」圓成實相が得知せらる。繩を蛇として見ることを離

れたるとき、繩を見て「蛇を見ざる」が如し。

と。而して、ここに云ふ虚妄分別の眞實義とは、蓋し、凡夫によりて遍計執されし所取能取としての體性を虚妄分別が捨離したる圓成實相に外ならないから、その眞實義に對應して豫想せらるる虚妄分別の虚妄義 (abhūta) とは、實には無なるに幻の如く虚妄に顯現せるその所取能取が自性として有なりと遍計執されし相を意味すると考へらる。

由つて今、「如幻相」の第三項約喻釋、第四項約義釋に於てのべらるる能喻の幻及び所喻の虚妄分別の有・無及び有無無差別義は、先に述べた如き三性を統一する依他起虚妄分別の不顛倒相をのべるものではあるが、主題とするところは、虚妄分別とその虚妄義即ち遍計所執相との關係を虚妄分別に於て特分別するものと考へらる。爾らば、虚妄分別とその眞實義即ち圓成實相との關係は云何と云ふに、そは前にも一言せる求法品の第四一偈 a—b に於て圓成實の自相の上で説かるるを見る。かくて、前者即ち虚妄分別とその虚妄義との關係は中邊分別論無上乘品十無倒中の「不動に於ける無倒」の所説に同じく、更に又、前後兩者の兩關係は同論相品第一偈に於て虚妄分別の有無相として語るる内容と同することとなる。

先づ、虚妄分別とその虚妄義との關係に就て論じよう。如幻相第四項約義釋(第二二偈)には次の如く云ふ。

同様に「所取能取としての」二の顯現はかしこに有る。されど彼「二者」の體は無し。夫故に色等の有と無とはのべらる。〔第二二偈〕

同様に、この虚妄分別に二としての顯現性は有る。されど二の體は無い。夫故に虚妄分別の自性に於て色等

梵文大乘莊嚴經論にあらはれたる三性說管見(野澤)

の有と無とはのべらる。

と。更に之は安慧によれば、<sup>⑤</sup>

例へば、幻の因相なる木片と土塊とには馬象のみとしての迷亂として顯現する義ある如く、虛妄分別依他起相には世俗に於て色等の所取能取の二として顯現する迷亂のみとしては世俗に於て有なる義ありと稱せらる。夫故に色等は有とものべらる。中邊分別論にも「虛妄分別は有り」とのべらる。所取能取の二は世俗に於ては有なりとの意味である。

かくの如く所取能取の二は迷亂としての顯現のみとしては世俗に於て有なりと雖も、勝義に於て所取の體・能取の體としては無である。夫故に色等は無なりとのべらる。中邊分別論中にも「そこに兩つのもの有るにあらず」とのべらる。勝義に於ては所取能取の二は無しとの意味である。

と云ふことである。ここに虛妄分別依他起の無相としてのべらるるものは増益せられたものの無であり、その増益とは虛妄分別の上に所取の體・能取の體として増益せられた人法なる遍計所執相に外ならないから、これを遍計所執性の側から云へば、かかる人法は本來増益せられたものなるが故に勿論勝義として有なるものではないが（離増益見）、さりとて世用性としては（vyavaharic）無なるものではない（離損減見）。そは、人法とは本來人執法執で執（grāha）の分位（avasthā）即ち遍計所執性の分位に於て語らるる名目（nāma）ではあるがその物柄（vastu）としては依他起に於て語らるる所取能取と異なるものでなく、而もその所取能取は依他起に於ては顯現のみの迷亂として有と許さるるからである。中邊分別論に遍計所執相の「不顛倒」相眞實」として語るものも固よりこの意味に外ならない。

茲に至つて、先の虚妄分別と虚妄義たる遍計所執の關係とはその體に於ける不異關係と云ひ得るであらう。この不異關係を有無無差別平等の旗幟を振り翳さして、より積極的に述べてゐるものは前にも一言觸れしことある第二二偈 c—d である。前には安慧の註釋によつて之を解したのであるが、今の場合としては無性の註釋の方がこの不異關係をより明瞭に詮はしてゐるから、左に無性の註釋を掲げよう。<sup>(16)</sup> 即ち、

彼處に彼〔象〕の形はある。「されど」象の形あるものは〔實には〕〔象等〕にあらず。彼處には似のみ (ndra-bāsam)、亂のみとして有なりと雖も、實としては (yathā-lag-pa-rīd-du || bhūta-vena) 象は有なるにあらず。夫故に、以上の如く知るとき〔實の〕〔象として執ること止息す。即ち、象の形相のみとして顯現せるものは〕〔實には〕〔象ならずとす。かの如く〕〔有無〕兩者は〔無差別〕平等となる。中邊分別論〔相品第七偈 c—d〕に「されば又取得と不取得とは平等なりと知るべし」と云へるが如し。

と。この指示によつて更に中邊分別論相品第七偈に對する安慧の註釋を見るに、「第一義に於ては取得すべからざる自性なれども、虚妄の物(＝世俗)として顯現せる義によりて『平等なるを語るを初めとして、本論の有無無差別平等義の理解を深める多くの註釋を與へてゐる。更に注意せらるべきは、第七偈 c—d 即ち、<sup>(15)</sup>「夫故に取得には取得すべからざる自性義ありと成ぜらる」なる相を以て (akāraṇa) 「虚妄分別中には二無し」(一偈 b) の立宗は自ら知らるべき義に由りて成ぜらるるなりとなす點である。有無無差別平等なる相 (kāra) によりて常に虚妄分別中に二なき遍計所執性の眞實が成就せらるるとは、先の所言を以て云へば、入法に對する増益損減執を離れることに外ならないから、虚妄分別とその虚妄義との不異關係がいよく、明確にせられる。尙ほ、如幻相第八項「所對治能對治分別 (vipakṣasavā-

bhāva-prātipaksika dharmavibh'ga) 中の「所對治分別」にのべらるる趣意も亦これに同じく、長行<sup>⑩</sup>には、

迷亂の相ある所對治の自性なる諸法は有と無と及び幻の如し。何故であるか。虛妄分別としてはかくの如く有なるが故に有である。所取能取としてはかくの如く無なるが故に無である。彼有と無とは無差別なる故に有でもあり無でもある。幻も亦かくの如き相がある。夫故に幻の如し。

と云ひ、安慧は之に對して、先に引用せる第二二偈を註釋せると同様の解釋を與へ、無性は正しく第二二偈を引用して釋し、更に次の如く結論してゐる。

彼虛妄分別の自性の上に (svatūpe) 識の二として顯現せるものは彼處に有る。されど識の顯現するや實義としての色等なる境としては (yañ-dag-pa-ñid-du gzugs-la-sogs-pa'i-don-gyis) 二の體 (svatūpa) なるものは彼處に無し。彼虛妄分別の上に二として顯現せるものは即ち二「の體」としては無である。かくの如く有無無差別である。

と。かくの如く全く同じ思想をのべるものではあるが、「所對治分別」と標題せらるるによりて知らるる如く、この不異關係を證はすに當り、能對治なる善等の清淨法に相對せる食等の雜染法としてのべられてゐること、換言せば、雜染法を滅して清淨法に悟入するといふ三性設定の本義の意趣の下に於てのべられてゐることは、注意せらるべきである。

さて、虛妄分別依他起性とその虛妄義たる遍計所執性との不異關係に於て虛妄がその虛妄の立場を失ふこと、即ち虛妄義たる遍計所執性の所取能取が無くなることは、同時に虛妄分別の眞實義のあらはれることであり、従つて、依他起性が轉依して圓成實性のみとなり自性清淨に還へることである。それ故に虛妄分別に於て語らるる依他起性・遍

計所執性の不異關係は之を法の眞實なる容態（圓成實性）から見れば、依他起性・圓成實性の不異關係となし得るであらう。これが先に虛妄分別とその眞實義との關係と云へるものであつて本論（求法品第四一個<sup>a</sup>）には眞如の自相として證はされてゐる。即ち、<sup>②①</sup>

又、圓成實相は眞如である。實に彼（眞如）は遍計執されし一切諸法の無性である。又それ（遍計所執）の無性として有なる故に有性である。更にその有と無とは差別なきが故に有無平等である。<sup>②②</sup>

と、更に安慧の註釋には次の如く云ふ。  
法界空性眞如の相を圓成實と云ふ。彼圓成實には所取能取の體（*bhāva*）有るにあらざる故に無性と云ふ。所取能取と離れたる空性は無きにあらざる故に有性と云ふ。夫故に中邊分別論に「そこに兩つのもの有るにあらず、されど空性はここに有り」と云ふ。……

空性の體が有るところには所取能取の無性も彼處に住し、所取能取の體が無きところには空性の有性も彼處に住する故に有無平等と云ふ。「夫故に」中邊分別論中に「空性はここに有り、そこに而も彼有り」と説く。この同じき莊嚴經〔論菩提品第七八偈 *c—d*〕佛性に悟入する方便の條下にも「現に無なるものこそ現に有なるものの最勝である。」と説く。

と。本論に説くこの空性眞如の自相、即ち、有・無・有無無差別平等相は、中邊分別論（*偈品第十三*）<sup>②③</sup>には「二の無及び無の有は空の相なり」として空性の相とせられ、更にその安慧釋疏には「無の有」を説く所以をのべ、その終りに「二の無は空性なり。而して彼無は虛妄分別中に有り、空性と云ふ、〔その〕無には有の相を領容するが故に法性の事相なり

と顯はされたるなり」と結論して居るが、この所説は文言こそ異なれ、本論に有無平等を語るその趣意と異なるを見ないところである。

× × ×

以上、私は虚妄分別依他起を中心として一方遍・依の不異、他方依・圓のそれを論じ、更にこの兩者の不異關係は一紙の兩面の如く同じ三性の不異關係を異なる二の立場より眺めたものに過ぎないことにも言及したのであるが、正しく三性の不異關係を論じてゐるものは本論眞實品(第一偈)であり、之に對する安慧の註釋には

遍計所執と依他起との二は圓成實と異なるに非ざる故に不異と云ふ。云何にしてか。依他起の自性を所取能取なりと遍計執したるを捨離せる性こそ圓成實性と稱せられるのみであつて、それを離れて圓成實性は別になきが故である。

とある。かくの如く三性不異の立場から語らるる圓成實性とは實に虚妄分別依他起に於て所取能取の空ぜられたるのみなる空性眞如、「法の無のみによりて顯示せらるる法性」であるから、法界をはなれたる法は一法もない世界、煩惱即菩提・生死即涅槃なる圓融無碍の世界である。

かかる世界の風光をのべるものは本論の到る處に之を求める得るが、眞實品には

勝義の理趣としてここに此の寂靜と生との二者には云何なる差別もあることなし(第五偈 a—b)

と説き、安慧はより明瞭に次の如く註釋を與へてゐる。<sup>(26)</sup> 即ち、

寂靜とは無明の滅乃至老死の滅なる涅槃のことである。生とは無明に緣りて行あり乃至生に緣りて老死ある

生死のことである。生死と涅槃との二は共に勝義の理趣としては無我の自性に於て平等である。所以は如何。生死は凡夫所遍計の我及び法の自性として空なると同じく、涅槃も亦凡夫所遍計の我及び法の自性としては空なるが故である。

かくの如く生死と涅槃との兩者は共に我法の自性としては空なる故に平等である。されば生死即涅槃である。

と。かくの如く「無我の平等性 (nairūmyasamata)」によつて生死即涅槃の語らるるのは「勝義の理趣 (paramarthavirtu)」としての所言であると云ふによつて理解せらるる如く、かかる世界は實に聲聞乘より出勝せる大乘菩薩道を前景とせる、實踐的要請としての寂靜涅槃界である。然し、勝義の理趣に對應する世俗の理趣としては、凡夫は生死に住し聖者は涅槃に住すと云はねばならぬ。夫故に、三性不異を語る勝義の理趣によつては實踐的要請としての平等なる法界は定立せられるけれども、そこには行道建立の餘地は與へられないのである。之に反し、世俗の理趣によつて三性不一を説き、そこに雜染(虛妄義)清淨(眞實義)なる虛妄分別依他起が亂事として有なりと安立することによつて始めてその雜染を減して清淨に還るべき行道建立の餘地は與へられると云ふべきである。されば、先に引用した三性不異を語る眞實品の文に續いて

然しながら、善業を作すものには生盡くるより寂靜の得ありと許さる〔第五偈 c—d〕

と頌せられ、安慧が之に註釋して

生とは生死のことである。生死は、無常なるに而も〔それを〕常なりと不如理に作意する顛倒より生ず。無常苦等を〔無常苦等として〕如理に作意するよりして〔彼〕顛倒は斷ぜられ、それより〔寂靜〕涅槃は得らる。

と云ふのも偶然ではない。尙ほ、眞實品はこれ以下(第六—十偈)に於て諸菩薩に不共なる涅槃を得る方便、即ち、無分別智を以て法無我を解了して佛地を得る方便、なる資糧道・加行道・見道・修道・究竟道を明してゐる。

以上の如く三性不一義によつて行道が建立せられ、その行道によつて空性圓成實性が次第に開顯せられゆく分位に従つて本論には空性が種々に分類せられてゐる。その主なるものを擧ぐれば、求法品(一)「求法眞實」、同じく(二)如幻相第八項「所對治能對治分別」、(三)第十一項「幻等の八喻義釋」等の所説である。(一)は客塵と和合し又離別する分位によつて「應淨・本性無垢(vicodhyan amalain yac ca prakityā)」の二の空差別を語り、(二)・(三)は物の差別(vastubheda)による空差別と考へられる。即ち、(二)に於ては所對治も能對治も共に「幻の如し(mayopama)」と説かれ、幻とは大智度論に出ずる所謂「十喻爲解空法」の隨一なるによつて知らるる如く空を解せしめる爲の喩である。今、能對治分別に就いて之を云へば、(A)念處等の三十七菩提分なる所修法(pratipadānīyadharmā)と(B)十二分教なる所説法(decītiadharmā)と(C)入胎等の所示現法(sānidāyītiadharmā)とが次第の如く凡夫によりて所取能取として遍計執された如くには無であり、如來によりて名句文を以て説かれた如くには無であり、示現された如くには無なる故に幻の如しとせらるるのは、行の境として實有なりと執することの空せらるることを意味する。(三)に於て語らるる八喻とは先に關説せる大智度論に出づる空法を解せしむる爲の十喻中、虚空と犍達婆城とを除いたものであつて次の如く八法の喩とせられてゐる。

1 幻 —— 六内處

2 夢 —— 六外處

3 陽焰——心心所

4 影像——六內處

5 眼華——六外處

6 反響——說法 (deṇādharmā)

7 水中月像——依三昧法 (samādhisattvīcīdharmā)

8 幻化——故意受生 (sañcinyabhavopapattiṭṭhāra)

それについて今、中邊分別論に説かるる十六空の内容を見るに、阿頼耶識の處・義(受用)・身としての顯現なる物 (vasu) による四空と、如理作意に於ける二種の「相に對する執 (nimitta-graha)」による十空と、最後に「空性の自性 (cūṇyāsvabhāva)」による二空とが安立せられてゐる。この中、物による四空と相に對する執による十空とは先の(一)(二)(三)の所説に同じく、空性の自性による二空は(一)に配當し得る。尤も彼にあつては數に限定があるが、修道上に於ける「相に對する執」による空差別の設定は必らずしも數に限定を受けるものでないから、以上の如く云ひ得ると思ふ。ともあれ、十六種空は般若波羅蜜經中に誦せらるるものであり、幻等の八喻義釋は空を解せしむる十喻に通ずるものであるから、此の八喻は般若中觀學派に謂ふ空が此派に於て如何なる意味に傳承せられたかを知るに重要なものと云はねばならぬ。尙ほ、攝大乘論(所知相分)にもこれと同じ八喻を以て依他起性を説き、彼處に「依他起を何故に〔經中〕所説の如く幻等の如しと説くか。〔曰く、〕他のものが依他起性に迷亂の義あることを疑ふを除かんが爲である」とて、八喻を説く理由をのべてゐるが、依他起に存する「迷亂の義」とは無なるに顯現すること・緣起である。而してそのこと

を疑ふを除くとは空なることを開明することであるから、説相少しく異なるも意趣に於て異なるものではないと思ふ。

註 ① *Maḥāyānasūtrālaṅkāra*, p.

② 山口益氏校訂梵本、一一三頁、同和譯一七三—一七四頁。

③ *Sūtrālaṅkāracaryātibhāṣya*, XLVI, p. 193 b.

/ *yons-su-grub-pa szun-lāsin-gyi-chos med-pas-na spros-pa-med-paḥo //*

④ *Maḥāyānasūtrālaṅkāra*, p. 59—62.

⑤ 山口益氏校訂梵本、一一四—一一六頁。同和譯一七七一—一八〇頁。

⑥ 佛教研究(佛教研究會編輯)第二卷第二號「智吉祥造『莊嚴經論總義』に就て」一二三頁参照。

⑦ *Maḥāyānasūtrālaṅkāra*, p. 59.

⑧ 山口益氏校訂梵本、一二二—一二三頁、同和譯三一—三四頁。

⑨ 常盤博士「佛教論叢」中の山口益氏著「法法性分別論管見」五四—一頁註③参照。

⑩ ⑦と同。

⑪ *Sūtrālaṅkāracaryātibhāṣya*, XLVI, p. 195, b

/ *dper-na sgyu-na-mkhan-gyi-siueṣ-dan-sman-gyi-mḥus rdo-dan-ḥin las rta-dan-glañ-po-la-sogs-pa suñ-ba (la) siugs-dan-sman-gyi-mḥu chud-nas rta-dan-glañ-po-ñi mi-mñon-gi rdo-dan-ḥin-bu mñon-bar-rgyur-ro / ..... / de-bṣin-du nam gzun-ba-dan-lāsin-ba-rñed-de rta-dan-glañ-po-ñi mi-mñon-gi rdo-dan-ḥin-bu mñon-bar-rgyur-ro / kun-gsi-tram-par-ces-pa gyan-dñan-gi-mñan-ñid gnas-gyur-na gñis-dan-bral-baḥi nam-par yons-su-grub-paḥi-mñan-ñid dñis-par-ḥgyur-te / dper-na ṭhag-pala sprul-du mñon-ba-dan-bral-na ṭhag-pa mñon-ba-bṣin-no /*

⑫ 山口益氏校訂梵本、二二九—二三〇頁、同和譯三四六—三四七頁参照。

⑬ 同梵本、一〇—一六頁、和譯二三—二二頁。

⑭ *Maḥāyānasūtrālaṅkāra*, p. 60.

⑮ *Sūtrālaṅkāracaryātibhāṣya*, XLVI, p. 197a

/ *dper-na spyu-maḥ-rgyu (in-dan-rdo-ba la rta-dan-glañ-po-ṣam-du ḥkhrul-par-sman-ba yod-pa de-bṣin-du yin yin-dag-pa-*

ma-yin-paḥi-kun-rtoḡs-pa ḡsan-ḡyi-dkan-ḡyi-mshan-ñid-de la ḡzngs-la-sogs-paḥi-ḡzun-ba-dan-ḥdsin-pa ḡñis-su-snañ-ba ḥkhrul-pa-tsam-du kun-rdsob-du yod-pa ḡses-bya-sic / de-bas-na ḡzngs-la-(197.a)-sogs-pa la yañ yod-par yañ brjod-do // dñi-phyir *ābus-dan-mthah-ṛnmu-par-ḥbyed-pa* las kyan / yañ-dag-ma-yin-kun-rtoḡs yod ces b, ad de / ḡzun-ba-dan-ḥdsin-pa-ḡñis kun-rdsob-du yod ces-bya-baḥi-don-to /

- / de-lar ḡzun-ḥdsin-ḡñis ḥkhrul-par-snañ-ba-tsam-du kun-rdsob-du yod kyan don-dam-par-na ḡzun-baḥi-dnos-po-dan-ḥdsin-paḥi-dnos-po ñid med-de / de-bas-na ḡzngs-la-sogs-pa la med-pa ḡses-brjod-do // de-bas-na *ābus-dan-mthah-ṛnmu-par-ḥbyed-pa* las kyan / ḡñis-po-de na yod-ma-yin ḡses-byad-de / don-dam-par-na ḡzun-ḥdsin-ḡñis med-do ḡses-bya-baḥi-don-to /
- ⑩ Mahāyānasūtrālamkāra, p. 96 a-b.

/ de-la de-lar-bu yod-pa-sic / glañ-po-che-la-bu yod-pa-(96b)-ḡan-yin-pa-de-ñid glañ-po-che-po-che-la-sogs med-pa-yin-no // de-la ḥdra-ba-tsam dan ḥkhrul-ba-tsam yod-kyi / yañ-dag-pa-ñid-du glañ-po-che yod-pa-ni-ma-yin-pas ḡaṇ-gi-tshe de-lar ces pa deḥi-tshe glañ-po-cher ḥdsin-pa ḥḡs-sic / glañ-po-che-la-bu-tsam-du snañ-ba ḡaṇ-yin-pa-de-ñid blañ-po-che med-payin-no // de-lar-na ḥdi mñam-pa-ñid-du ḥḡyur-te / *ābus-dan-mthah-ṛnmu-par-ḥbyed-pa* las ji-skad-du / dñi-phyir-na dñiḡs-pa-dan / mi-dñiḡs mñam-par-ces-par-bya ḡses-bya-ba-lir-bu-yin-no /

- ⑪ 山口益氏校訂梵本二八頁、同和譯四三頁。

- ⑫ 同梵本、二七頁、和譯四二頁。

- ⑬ Mahāyānasūtrālamkāra, p. 61.

- ⑭ Mahāyānasūtrālamkāra, p. 98b

/ yañ-dag-pa-ma-yin-paḥi-kun-tu-rtoḡ-paḥi-no-bo-ñid-de la rnam-par-ces-paḥi-ḡñis-su-snañ-ba ḡaṇ-yin-pa-deni-de-la-yod-la / rnam-par-ces-pa snañ-ba ḡsal-te yañ-dag-pa-ñid-du-ḡzngs-la-sogs-paḥi-don-ḡyis-ḡñis-kyi no-bo ḡaṇ-yin-pa-de-ni de-la-med-do // yañ-dag-pa-ma-yin-paḥi-kun-tu-rtoḡ-pa-de-la ḡñis-su-snañ-ba ḡaṇ-yin-pa-de-ñid ḡñis-nu-med-pa-yin-te / de-lar-na yod-pa-dan-med-pa-dag khyad-par-med-pa-yin-no /

- ⑮ Mahāyānasūtrālamkāra, p. 65

- ⑯ Sūtrālamkāraupitiḥāṣya, XLVI. p. 208a.

梵文大乘莊嚴經論にあらはれたる三性説管見(野澤)

chos-kyi-dhlyis ston-pa-ñid de-bšin-ñid kyi mshan (ñid) la yoiṣ-su-grub-pa ṣes-bya-sic / yoiṣ-su-grub-pa-de la gzun-ba-dan-  
 ḥdsin-paḥi-dnos-po yod-pa-ma-yin-pas dnos-po-med-pa ṣes-byaḥo // gzun-ḥdsin-dan-bral-baḥi-ston-pa-ñid med-pa-ma-yin-pas  
 de dnos-po-yod-pa ṣes-bya-sic / de-bas-na *dnos-dan-mthah-rnam-par-thyeḍ-pa* las kyan “gñis-po de-na yod-ma-yin / ston-  
 pa-ñid ni de-na yod” ces b’ad-do / .....

/ ston-pa-ñid-kyi-dnos-po yod-pa-la gzun-ḥdsin-gyi-dnos-po-med-pa yan de-na-gnas la / gzun-ḥdsin-gyi-dnos-po-med-pa-la  
 ston-pa-ñin yod-pa-de-na-gnas-pas dnos-po-dan / dnos-po-med-pa mñam-pa ṣes-bya-sic / *dnos-dan-mthah* las kyan / “ston-  
 pa-ñid ni de-na yod / de-na yan ni de yod-do //” ṣes b’ad-do // mdo-sde-rgyan-lji-ñil-kyi-saṁs-r’yas-kyi-dhbs-la-ḥjig-  
 paḥi-skaḥs, las kyan,” gan gzun-ba-dan-ḥdsin-pa-gñis med-pa de-ñid yod-paḥi-mchog-sic / yoiṣ-su-grub-paḥi-mshan-ñid-du  
 yod-baḥi-phyr-ro” ṣes-b’ad-do /

②③ 山口益氏校訂校本・四六一四七頁、同和語七三頁。

②④ Mahāyānasūtrālaṅkāra, p. 22

②⑤ Sūtrālaṅkāravivṛtibhāṣya, XI, VI, p. 85a

/ kun-tu-brtags-pa-dan-gsun-gyi-dhan-gñis dan yoiṣ-su-grub-pa ḥa-dad-pa yan ma-yin-yas-na gsun-ma-yin-pa ṣes-bya-sic /  
 ji-la ṣe-na gsun-gyi-dhan-gi-ran-bšin la gzun-ḥdsin-du kun-tu-brtags-pa-dan-bral-ba-ñid la yoiṣ-su-grub-paḥi-ran-bšin ṣes-bya-  
 bar-zad-kyi de-la-ma-gfog-par yoiṣ-su-grub-paḥi-ran-bšin logs-cig-na med-paḥi-phyr-ro /

②⑥ 常盤博士「佛教論叢」中の山口益氏著「法法性分別論管見」(V丁)「法と法性との一異について」五四三頁参照。

②⑦ 主なるものを舉ぐれば、功德品第五二偈(校本二六九頁)・求法品第二三偈(六〇頁)・修行品第二一一五偈(八七頁)・等  
 々々。

②⑧ Mahāyānasūtrālaṅkāra, p. 23.

②⑨ Sūtrālaṅkāravivṛtibhāṣya, XI, VI, 85a.

/ ši-ba ni ma-rig-pa ḥgags-pas-na rga-ḥi ḥgag-paḥi-bar-gyi-nya-nun-las-ḥdas-pa la-byaḥo // skye-ba ni ma-rig-paḥi-rikyen-gyis  
 ḥdu-byed-pas-na skye-baḥi-rikyen-gyis rga-ḥi-bar-gyi-ḥkhor-boḥi-mshan-ñid la-bya-sic/ḥkhor-ba-dan-ga-nan-las-ḥdas-pa-gñis  
 kyan don-dam-paḥi-tshul-du-na baḥg-med-paḥi-ran-bšin-du mñam-no // ji-la ṣe-na / ji-lar ḥkhor-ba-byis-pas brtags-paḥi-

bdag-dan-chos-kyi-ran-bšin-gyis ston-pa de-bšin-du mya-nan-las-hdas-pa yan lyis-pas brtags-paḥi-bdag-dan-chos-kyi-ran-bšin-gyis ston-ste /

de-lar bdag-dan-chos-kyi-ran-bšin-gyis ston-pas ḥkhor-ba-dan-mya-nan-las-hdas-pa-gñi-ga mñam-pa-yin-te / de-las-na ḥkhor-ba-gan yin-pa-de-ñid mya-nan-las-hdas-pa-yin-te /

⑩ ibid. p. 89 a-b.

skye-ba-ni ḥkhor-ba-la-bya-ste / ḥkhor-ba-ni mi-rtag-pa la rtag-pa la rtag-pa-lasogs-par tshul-bšin-ma-yin (89, b) / paḥi-yid-la-byas-paḥi-plyin-ci-log-las byun-ba-yin-no // mya-nan-las-hdas-pa-ni mi-rtag-pa-dan / sduḡ-bśhal-la-sogs-pa tshul-bšin-yid-la-byas-pas phyin-ci-log-spaṅs-pa las thob-pa-yin-te /

⑪ 佛教研究(佛教研究會編輯第二卷第四號常本憲雄氏「空の概念的意義」七五頁以下參照。尙ほ、常本氏は十喻の二々について明解を與へられてゐるが、今二に八喻についての安慧の註釋を紹介しよう。

(1) 眼處乃至意處の六内處は幻の如し。何故なるか。幻の象馬等には我有情命者(の體)なしと雖も、我有情命者として顯現する如く、内の六處にも亦我有情命者(の體)なしと雖も、我有情命者として顯現する故に、幻の如し。

/ mig-gi-skye-mched-mched-nas yid-gyi-skye-mched-kyi-bar-du nañ-gi-skye-mched-drug ni sgyu-ma-lu-bu-ste / ciñi-phyir se-na / sgyu-mañ-glan-po-dan-mig (rtu) la-sogs-pa la bdag-dan-sens-can-dan-stog med kyan bdag-dan-sens-can-dan-stog lta-bur snan-ba de-bšin-du nañ-gi-skye-mched-drug la yan bdag-dan-sens-can-dan-stog med-mod-kyi bdag-dan-sens-can-dan-stog-lta-bur snan-bas-na sgyu-ma-lu-buḥo // (XIV, p. 201, a)

(2) 色乃至法に至る六外處は夢の如し。何故なるか。夢中に顯現せる色・聲・女・男等は識所受用の境として顯現すと雖も〔實には〕有に非る如く、現在よのあたり色・聲等は識の境として顯現すと雖も有なるに非る故に夢の如し。

/ gzugs-nas-chos-kyi-bar-du phiyiñi-skye-mched-drug-ni rmi-lam-la-bu-ste / ciñi-phyir se-na / rmi-lam-na snan-bañ-gzugs-dan-sgra-dan-bud-med-dan-skyos-pa-la-sogs-pa rnam-par-ces-par (pas) kun-tu lois-sgyod-paḥi-yul-la-bur snan yan yod-pa-na-yin-pa de-bšin-du da-lar dnos-su gzugs-dan-sgra-la-sogs-pa rnam-par-ces-paḥi-yul-du snan yan yod-pa-ma-yin-paḥi-phyir rmi-lam-la-buḥo / (同上)

(3) 心心所の二は陽焰の如し。何故なるか。陽焰は水なくしても水の如き迷亂を作る如く、青・黄等のこれら諸法は有なる

梵文大乘莊嚴經論にあらはれたる三性說管見(野澤)

に非されども(心心所は)青黄としての迷亂を取る故に陽焰の如し。

/ *soms-dan-sens-las-byun-ba-gñis-ni smig-rgyu-la-bu-ste / ji-la-se-na / smig-rgyu chur-med kyan chu-la-bur nor-par-byed-pa de-bñin-du si'on-po-dan-ser-po-la-sogs-pa'i-dhos-po-ñi'i-cag yod-pa-ma-yin kyan si'on-po-ser-po-la-bur nor-par-luñsin-pa'i-phyir smig-rgyu-la-duho / (同E.)*

(4) 又、眼處乃至意處の内の六處は影像の如し。何故なるか。鏡の内の影像は有に非されども物の力によりて鏡の内に影像顯現する如く、現在の内の六處も亦過去世の業の力によりて顯現する故に影像の如し。

/ *yan mi-gi-skye-mched-nas-yid-kyi-skye-mched-kyi-bar-du nan-gi-skye-mched-drug-ni gzugs-brñan-la-bu-ste / ciñi-phyir se-na / me-lon-gi-nan-gi-gzugs-brñan yod-pa-ma-yin yan gzugs-kyi-dban-gis me-lon-gi-nan-duñan gzugs-brñan (201, b) snan-ba de-bñin-du du-lar-gyi-nan-gi-skye-mched-drug-po-de-dag kyan tsho-sin-mañi-las-kyi dñan-gis snan-bas-na gzugs-brñan-labaho / (5) 又、色乃至法の外の六處は眼華の如し。眼華とは、影の、とある。何故なるか。傘蓋(chattrā)と身等の力によりて影生する如く、外處も亦内處の影である。阿耨耶識より眼等の内の六處生じ、それより外の六處顯現生起するが故に外の六處は眼華の如し。*

/ *yan gzugs-mus-chos-kyi-bar-du phyiñi-skye-mched-drug-ni mi-gyor-la-bu-ste / mi-gyor ses-bya-ba-ni skabs-ñid-ri gri-b-na-la-byaho / ji-la-se-na / gñugs-dan-lus-la-sogs-pa'i-dban-gis gri-b-na byu'i-ba de-bñin-du phyiñi-skye-mched kyan nan-gi-skye-mched-kyi-gri-b-na yin-te / kun-gsi-rnan-par-ras-pas (=pa-las) ni mi-g-la-sogs-pas (=pañi) nan-gi-skye-mched-drug lbyun-ñio / de-las-ni phyiñi-skye-mched-drug snan-sin-lbyun-bas-na skye-mched-drug ni mi-gyor-la-buho /*

(6) 一切説法は反響の如し。何故なるか。反響は聲の自性としては無なりと雖も耳の行境となり耳によりて聞かれるものとして有なる如く、所有一切法は如來によりて説かれた如くには有なるに非ずと雖も耳の行境となり耳の聞き得るとなるが故に反響の如し。

/ *byad-pa'i-chos-thams-cad-ni brag-ca-la-bu-ste / ciñi-phyir se-na / brag-ca yan sgruñi-ran-bñin-du med-mod-kyi rna-ba'i-spyod-yul-du-ñgyur-ñin-rna-bas-mñan-du yod-pa-dan-ñidra-bar ji-sñed-du de-bñin-gs-egs-pas chos-thams-cad ji-lar b,ad-pa bñin-du yod-pa-ma-yin yan rna-ba'i-spyod-yul-du-ñgyur-ñin-rna-ba'i-mñan-du-rin-ba'i-phyir brag-ca-la-buho /*

(7) 依三昧法は水中の月像の如し。何故なるか。清澄なる水中に月像現はれる如く一境性の三昧は清澄なる水の如く、彼三

味中に〔八〕邊處・〔十〕勝處等顯現する故に水中の月像の如し。

*/ tñ-né-ñdsin-la-gnas-pañi-chos-rnams-ni chu-zlañ-gzags-brñan-la-bu-sie / cñi-phyr se-na / chu-dan-bañi-nan-du zla-bañi-gzags-brñan snan-ba-dan-ñdra-bar tñ-né-ñdsin-rise-gcig-pa-ni-chu-dan-ba-la-bu-sie / de-la[s] mñah-dag-skye-mohet-dañ-zli-kyi-gnon-pañi-skye-mched-rnams snan-bas chñi-zla-ba-la-buño /*

(8) 故意受生は幻化の如し。何故なるか。例へば、幻化は一々の場所に於て食願生ぜざる如く、菩薩は有情の爲に一々の世に〔生〕を取ると雖も食願生ぜざる故に幻化の如し。

*/ bsams-bjin-du srid-par-ñdsin-pa-ni sprul-pa-la-bu-sie / cñi-phyr se-na / dper-na sprul-pa-gnas-gcig-nas-gcig-tu yan clags-pa-dañ-se-slan mi-skye-ba de-bjin-du byañ-chub-scams-dpañ sens-can-gyi-don-du tshe-gcig-nas-gcig-tu len ein-ñdsin kyai clags-pa-dañ-se-slan mi-skye-bas-na sprul-pa-la-buño /*

(12) 山口益氏校訂梵本五二―五八頁、同和譯八二―九〇頁。

(33) 佐々木月樵著「攝大乘論」四二頁、附錄西藏譯六八―六九。今は西藏譯より譯出す。

## 四、結 論

以上のべし如き三性の眞實、即ち不顛倒相としての有・無・有無無差別平等義、従つて、三性の不一不異義、なるものは最も重要な根本教學であつて、本論に説くところ廣しと雖もこの教學を各方面より説けるものに外ならない。而してこの不一不異義を一遮怖畏無自性・自性清淨、(mñsvabhāvatāprakṛitiparīuddhīrāsapratiscāha)なる論題の下に幻と虚空との喩を以て合説せるものを本論修行品中に有する。依つて今、ここに以上論ぜしことの結論として之に言及したいと思ふ。

先づ、第十六偈には、

梵文大乘莊嚴經論にあらはれたる三性説管見(野澤)

法の無なるに而も得知せらるると、無染なるに而も清淨なるとは〔次第の如く〕幻等の如く虚空等の如しと知るべきである。

とその綱要を提示してゐる。先づその幻の喩によつて顯す意味に關して云へば、例へば、幻は體無であるけれども馬象等として得知せらるる如く、諸法は自性としては體無であるが色等としては得知せらるる故に、無自性空なるに而も得知し得と説くも矛盾せずと云ふのである。更にこの關係について第十七偈に畫の喩を以て次の如くのべてゐる。曰く、

例へば、畫を如理に (vidhinat) 描くときには〔畫面に〕高下無しと雖も而も〔高下が〕見らるる如く、正にそれと同じく虚妄分別に於ても亦一切處に二は常に無しと雖も而も〔二が〕見らる。

次に虚空の喩を以ては、例へば、虚空は自性清淨なれども客の雲によりて汚されて垢有るものとなる故に雲とはなれるとき清淨となる如く、法界も自性清淨なれども客なる貪等の煩惱の爲に有垢となる故に、後にその垢を清めるとき清淨となる。されば、法界無染なるに而も後に清淨となるとせらるるは矛盾せざることとを謂はんとするにある。更に第十八偈に於て水の喩を以て

例へば、濁水が清淨にせらるるとき彼清淨性が〔新に〕他より生ずるに非らずして泥と離れたる彼〔水〕が獨り彼處にあるのみである。實に自の清淨心にも此の同じき理趣がある。とて無染なるに而も清淨にせらるべき所以をのべてゐる。

かくの如く諸法は空であり法界は自性清淨なりとせらるるのは三性不異の立場・第一義よりの所言であつて、虚妄

分別の虛妄義たる遍計所執の所取能取が却つて空無としてある状態・虛妄分別の眞實義が圓成實性のみとして本來の姿・自性清淨にある状態である。然しながら、世俗現實としては即ち三性不一の立場より云へば、圓成實相の法性心は有垢として存するから、換言せば、依他起心が虚妄に分別せる現實の有相・存在相によりて汚されてゐるから、有垢をして本來の姿・自性清淨に立ち還へらしむべく努力することが要求せらるるのである。それ故に、「心の水との同法性 (tōyasādharmyān citte)」そのべゝ第十九偈は修道の目的が那邊に存するかを物語るものと云ふべきである。<sup>①</sup>即ち、

而して心は自性明亮なりと説かれてゐる。「然るに」彼「心」は常に客の過によりて害せられてゐる。「自性明亮なる心とは」法性心を離れた他の心の明亮〔を謂ふ〕にあらずして自性中の「明亮」を謂ふのである。

と云ひ、更に安慧は之をより明細に註釋して、

自性清淨心とは云何なる心を指すか。無二圓成實相なる法性心を謂ふ。されど圓成實相を離れた依他起〔の虚妄に分別せる〕心相を自性清淨心とは云はず。何故なるか。依他起〔虚妄分別〕心は有漏の貪信等によりて常に汚され刹那毎に俱生俱滅して有垢として住する故に自性明亮心たるを得ず。然るに、圓成實相なる法性心は輪廻と俱生俱滅する有漏によりては有垢とせられざるが故に自性明亮と稱せらる。……自性清淨心と説けるは一切の心を謂ふにはあらずして圓成實相なる心眞如を自性清淨心と謂ふ。それ故に心の聲は心眞如を指すと知るべきである。

と云ふ。これ本論<sup>③</sup>各所に主客能所對立の世俗の上に行道——瑜伽行を施設して客なる虚妄分別心を滅して心の法性たる法界に悟入すべく努力勤勇せらるべきことが詳細に説かれてゐる所以であると思ふ。

× × ×

前來三性の不顛倒相としての有相が瑜伽行道の過程・實踐的要請としての有と設定せられたのみであつて單なる有法でない點、及びその無相は二を遠離せること・二無なることを謂ふ點等に徴して三性はそのまま三無性と稱せられるのである。本論求法品「求無自性義 (nīsvabhāvatā paryeṣitī)」<sup>④</sup>の三無性を説くものである。安慧はこの論題を釋して<sup>⑤</sup>

諸經中に「一切法無自性自性涅槃」と説く。云何が無自性、云何が自性涅槃なるかを觀察するを求と云ふ。その中、法とは三種、遍計所執と依他起と圓成實とである、

と云ふ。これによれば、一切法無自性と説く場合に、三性三無性を説くことなしに唯總じて一切法無自性となす場合と一切法無自性なることを三性三無性によつて開顯して一切法無自性となす場合とがあつた如くである。然るに、今茲に安慧は、「一切法無自性」と云つてゐるその法とは三性と特殊づけて居るから、一切法無自性とは即ち一切法の三無自性が歸納的に導き出されると云ふことである。その三無性については前にも言及したことがあるから、三無性<sup>⑥</sup>に就て論ずることを今は割愛する。

註① Mahāvāsanāśālikāra, p. 88

② Sūtrālaṅkāravivēkaḥ, XI, VI, p. 285b; 286 a-b

/ sems-ran-bśin-gyis-dag-pa-de sems gan la bya se-na / dehi-plyir /  
sems-kyi-chos-de nīd las gsum-dag ni /

/ ran-bśin-rnam-par-dag-pāli-sems ni- (286a) b ad

ces-bya-ba smos-te / de-la sems-kyi-chos-ñid gñis-su-med-pa yois-su-grub-pa'i-mshan-ñid-de ñid-de ñid la rañ-bśin-gyis-rnam-par-dag-par b,ad-kyi yois-su-grub-pa'i-mshan-ñid-la-na-gtogs-pa gśan-gyi-dban-gi-sems la ni rnam-par-dag-pa'i-sems su mi-b,ad-do ses-bya-ba'i-don-to / cñi-phyr še-na / gśan-gyi-dban-gi-sems ni zag-pa-dan-beas-pa ñodod-chags-dan-dad-pa la-sogs-pas rtag-cu rñog-cin / skad-cig-na-re-re la lhan-cig skye / lhan-cig ngag-sde dri-ma-can-du gñas-pas rañ-bśin-gyis ñod-gsal-pa'i-sems-su mi-rigs kyí(s) yois-su-grub-pa'i-mshan-ñid sems-kyi-chos-ñid ni zag-pa-can ñikhor-ba'i rñams dan lhan-cig skye-ñi ngag-pas dri-ma-can-du byed-pa-na-yin-pa'i-phyr rañ-bśin-gyis-ñod-gsal-ba ses-byaho // .....  
 sems rañ-bśin-gyis-rnam-par-dag ces-b,ad-pa yai sems-kun la mi-byahi sems-kyi-de-bśin-ñid yois-su-grub-pa'i-mshan-ñid la sems rañ-bśin-gyis-rnam-par-dag-pa ses-bya-sde / de-bas-na sems-kyi-sgra ni sems-kyi-de-bśin-ñid la bya-bar-rig-par-byaho /

③ 例へば、眞實品、第五十偈、求法品四七、四八、四九偈、修行品第二一六偈、教授品等。

④ Mahayanasūtrābhikāra, p.67.

⑤ Sūtrābhikāravittibhāṣya, XLVI, p. 21b a-b

/ mdo-sde-dag-gi-nam-nas chos dñams-cud ni dños-po-med-pa dan / rañ-bśin-gyis-mya-nan-las-ñid-pa ses-b,ad-de / ji-lear dños-po-med-pa dan / rañ-bśin-gyis-mya-nan-las-ñid-pa yin-par bñag-pa la yois-su-ñshol-ba ses-byaho // de-la chos rnam-pa-gsum-te / kun-bñags dan gśan-dhan dan yois-su-grub-pa'ho /

⑥ 宗教研究、新二三卷第三號。